

ウェブメディアリテラシー教育の提言

-機能不全状態にあるウェブサイトのデザインについての批判的検討-

青山 知靖†

概要

筆者が所属する静岡県立大学の公式ウェブサイトには、ウェブページの表示フォントのサイズを変更する機能が備わっている。この機能を利用すると、ウェブページのフォントサイズは、確かにある程度は変更されるが、サイトの利用者の期待どおりには変更されない。この意味において、本学のウェブサイトは機能不全状態にあるとみなすことができる。この実例を出発点として、本論文では、本学経営情報学部にも所属する学生を対象とした予備的実践をもとに、ウェブサイトを通じたコミュニケーションについての洞察力を深めることを目的としたウェブメディアリテラシー教育の提言を行う。

A Proposal for Web Media Literacy Education:

Critical Analysis of Dysfunctional Website Design

Tomoyasu Aoyama †

Abstract

The official website of the author's university, the University of Shizuoka, has font size adjustment buttons in the top right corner of every webpage. While these buttons do in fact change the font size to a certain extent, they don't enlarge it sufficiently to meet the expectations of its users. In this sense, the website can be seen as dysfunctional. With this example as a starting point for analysis and discussion, this paper proposes an approach to web media literacy education in which students can acquire deeper insight into website communication. This approach will be incorporated into a pilot seminar targeted at students in the School of Management and Information at the University of Shizuoka.

1. はじめに

本論文では、筆者が所属する静岡県立大学の公式ウェブサイトの機能不全状態の分析を出発点として、インターネット時代のメディアリテラシー教育を検討する。そして、ウェブサイトを通じたコミュニケーションについての洞察力を深めることを目的とした、新たなメディアリテラシー教育の提言を行う。

2. インターネット時代のメディアリテラシー教育

メディアリテラシーとは「市民がメディアを社会的文脈でクリティカルに分析し、評価し、メディアにアクセスし、多様な形態でコミュニケーションを創り出す力」¹⁾を意味す

る。この背景にあるのが、現代社会はメディアが遍在する社会、つまり、メディア社会だという事実である。現代社会に暮らす我々には、単にメディア社会にあふれる情報の受け手となること以上に、さまざまな知識・態度・能力が求められる。それは、我々のメディアとの関係をより能動的なものにする知識・態度・能力である。

伝統的なメディアリテラシーでは、テレビや新聞などのジャーナリズム・メディアまたはメインストリーム・メディアが取り上げられることが多い。例えば、テレビや新聞による事件の報道を検証し分析することで、メディアが構成する「現実」を批判的に分析したり、情報の送り手と受け手の両者の存在をより意識した報道内容を検討することなどである。言い換えるならば、伝統的なメディアリテラシーが注目しているのは、いわゆるマス

† 静岡県立大学
University of Shizuoka

メディアをめぐる情報の送り手と受け手の関係である。

一方で、我々の暮らす現代社会には、コンピュータやインターネットなどのメディアが急速にかつ遍的に浸透しつつある、という事実がある。このため、メディアの利用者としての我々に求められる知識・態度・能力も、コンピュータやインターネットなどの新たなメディアに対応できるものである必要性が生じる。また、メディアリテラシーでも、コンピュータやインターネットなどのメディアをめぐる情報の送り手と受け手の関係を取り扱う必要がある。以下では、新しいメディアリテラシーの取り組みとして、ウェブサイトを通じた情報の送り手と受け手の関係に注目する。具体的には、機能不全状態にあるウェブサイトのデザインについての批判的検討の能力を育むリテラシー教育を取り上げる。

3. ウェブデザインの批判的検討

筆者が所属する静岡県立大学の公式ウェブサイトには、すべてのウェブページに、表示フォントのサイズを変更する機能（以下、フォントサイズ変更機能）が備わっている（図1）。標準は「小」のサイズになっており、「中」「大」のボタンをクリックすることで、サイズをそれぞれに大きくすることができるようになっている。インターネットの利用者としての筆者の経験によれば、このような機能は非常に多くのウェブサイトにも備わっている。例えば、静岡県にある大学・短期大学・高等専門学校全28校・キャンパスの公式ウェブサイトのうち11（約40%）が同様の機能を備えている。

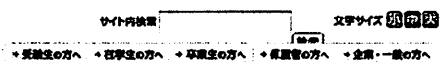


図1 フォントサイズ変更機能
(ページ最上右部に配置)

しかしながら、インターネットの利用者としての筆者の経験によれば、このようなフォントサイズ変更機能のほとんどは機能不全であるとみなすことができる。フォントサイズ変更機能を利用すると、サイズは確かにある程度は変更されるが、期待する結果が得られないことがほとんどだからである。このことを確かめるために、筆者は、本学経営情報学部所属する学生8名を対象に、本学の公式ウェブサイトが備えるフォントサイズ変更機能に関する調査を行った。

本調査では、はじめに、標準的なノート型Windows7パソコンに液晶プロジェクターを接続し、映像をスクリーンに投影することで、本学のウェブサイトのトップページを学生に提示した。ウェブブラウザはInternet Explorer 9を使用した。次に、12ポイント（「小」、つまり、標準サイズ）から90ポイントの14段階のフォントサイズスケール（図2）の印刷物を学生に提示し、「中」「大」のボタンをクリックした場合のフォントのサイズの期待値を記入させた。最後に、「中」「大」のボタンを実際にクリックしてトップページを表示し（図3）、変更されたフォントのサイズの実感値を測定した。調査結果によれば、「中」では8名中5名について、「大」では8名すべてについて、実感値が期待値を下回った。また、8名すべてについて、「中」のずれより「大」のずれの方が大きかった（表1を参照）。

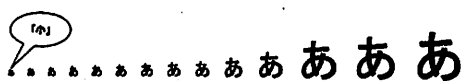


図2 14段階のフォントサイズスケール

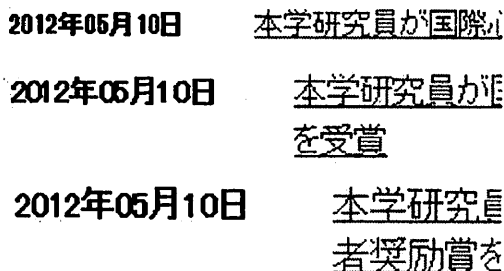


図3 フォントサイズ変更機能を使用した文字拡大の実際（上から「小」「中」「大」）

表1 フォントサイズ変更の期待値と実感値

学生	学年	中			大		
		期待値	実感値	ずれ	期待値	実感値	ずれ
A	M2	5	3	2	8	4	4
B	M2	3	3	0	9	4	5
C	B4	4	3	1	10	7	3
D	B1	3	3	0	5	4	1
E	B1	6	4	2	10	6	4
F	B1	5	2	3	9	3	6
G	B1	6	6	0	9	7	2
H	B1	6	5	1	10	9	1
平均		4.75	3.63	1.12	8.75	5.50	3.25

また、本調査では、フォントサイズ変更機能に関する満足度調査を行った。調査結果によれば、「中」「大」のボタンのいずれについても、満足度が分散した(表2を参照)。表1と表2を詳細に分析すると、フォントサイズ変更の期待値と実感値との間のずれが平均以上だった学生は、フォントサイズ変更機能に不満であると回答する傾向が見られた(「中」は3名中2名、「大」は4名すべて)。

表2 フォントサイズ変更機能に関する満足度の分布(単位:名)

	とても 不満	少し 不満	どちら でもない	少し 満足	とても 満足
中	1	2	2	3	0
大	1	3	2	1	1

ここまでの調査結果から、少なくとも本学のウェブサイトに関して言えば、フォントサイズ変更機能は利用者に期待どおりの結果をもたらすものではないということが言える。また、もたらされる結果も満足に達するとは限らない。この意味で、本学のウェブサイトは、部分的にはあるが、機能不全状態にあると言ってもよい。

本調査ではまた、自由記述回答式の質問によって、サイズ変更機能についての感想・意見・コメント・疑問点などを求めた。以下は、学生から寄せられた回答の概要である。

学生 A (M2)

- ・ ボタンをクリックした際のサイズ変更のイメージがわからない。
- ・ テキスト部分のサイズが変更されてもテキスト情報を含む画像のサイズは変更されないで、フォントサイズが変更できたかどうか分かりにくい。
- ・ 画像を多用しているウェブサイトでは有効な機能ではない。

学生 B (M2)

- ・ ページ最上右部に表示されているボタンの文字を実際の文字の大きさに変更すべきだ。
- ・ 「大」で変更されるサイズは実際にはあまり大きくなっていないから、ウェブページが見づらいと思っている人にとっては見づらさがほとんど変わらない。

学生 C (B4)

- ・ このような機能があることに驚いた。
- ・ 「小」「中」「大」のボタンがすべて大きさなので、サイズ変更の予想がつきにくい。

学生 D (B1)

- ・ よい機能である。
- ・ 「中」「大」にした方がウェブページが見やすくなった。
- ・ 小さな文字が見えにくい人たちにも役立つ。
- ・ 大手検索サイトなども導入すべきである。

学生 E (B1)

- ・ 「小」「中」「大」のボタンがすべて同じ大きさなので、実際の大きさに比例するように、ボタンのデザインを変更すべきである。
- ・ ボタンが小さく目立たないので、色や大きさを変えて目立たせるべきである。

学生 F (B1)

- ・ 「小」サイズが一番見やすいので、この機能を使うことはなかった。
- ・ 「中」サイズはまあまあよかった。
- ・ 「大」サイズはもう少し大きい方がよい。

学生 G (B1)

- ・ 本学のウェブサイトは何度も利用しているが、文字サイズ変更のボタンをこれまで意識したことはなかったの、サイズ変更機能はこれまで一度も利用したことはなかった。
- ・ 実際に利用してみると、ページが見やすくなるので、よい機能だと思う。
- ・ 「大」サイズはもう少し大きい方がよい。なぜなら、利用者側はもう少し大きいサイズを期待するからだ。

学生 H (B1)

- ・ ボタンがあまりに目立たないので、この機能のターゲットであるご老人などの方には効果が薄いと考えられる。

4. ウェブメディアリテラシー教育の展望と可能性

本学の公式ウェブサイトには備わっているようなフォントサイズ変更機能には、いったいどのような意味があるのであろうか。また、この機能はどのような理由・過程でウェブサイトには備わったのであろうか。さらに、ウェブサイトを機能不全に陥らせるようなウェブデザインの背後にあるコミュニケーションとはいったいどのようなものであろうか。以下では、ウェブサイトを通じた情報の送り手と受け手の関係に着目し、今後のウェブメディアリテラシー教育の展望と可能性を二点検討する。

まず、第一点目の展望と可能性として、ウェブサイトを通じた情報の送り手と受け手の関係に着目することで、ユーザビリティやアクセシビリティについての洞察を深めることを挙げたい。本学の公式ウェブサイトをめぐるコミュニケーションでは、ウェブサイトの運用主体である本学、ウェブサイトの制作者、ウェブサイトの利用者という三者の相互関係に注目する必要がある。本学は利用者の便宜を図るために、フォントサイズ変更機能をウェブページに備えたはずだ。これは、より大きなフォントサイズでのウェブページの表示を必要とする利用者のための機能であると考えられる。そのような利用者とは、老眼や弱視などの視覚に何らかの障害を持つ利用者であると考えられる。つまり、フォントサイズ変更機能は、いわゆる情報弱者を想定した機能として提供されていることが考えられる。言い換えるならば、フォントサイズ変更機能は、情報弱者にとってのウェブサイトのユーザビリティやアクセシビリティの確保と向上を目的とするものである。

問題となるのは、ここでのユーザビリティやアクセシビリティの確保と向上が、実際の利用者の立場から真に保証されているのかどうかという疑問が生じることである。本研究で行った調査結果によれば、フォントサイズ変更機能は有効に機能しない。つまり、本学が講じたユーザビリティやアクセシビリティの確保と向上は、利用者の立場からはほとんど意味をなさないということである。この意味で、本学と利用者との間にはウェブサイトを通じた健全なコミュニケーションが成立していない、といっても過言ではない。ユーザビリティやアクセシビリティに関する本学の知識・態度は誤った／偏ったものであると言ってもよい。

第二点目の展望と可能性は、ウェブデザインの根幹をなす HTML と CSS についての理解をより深めることである。容易に想像がつくとおり、本学の公式ウェブサイトは、CSS によって、表示フォントのサイズを「小」「中」「大」の三種類に限定している。この制約のために、利用者には自由なフォントの種類とサイズの変更が認められていない^(註)。つまり、ウェブサイトの制作者と利用者のそれぞれの思惑・意図・期待には大きなギャップが存在している。言い換えるならば、正しくコーディングされているはずの HTML と CSS が、制作者と利用者との間のウェブサイトを通じた健全なコミュニケーションを導いていないのである。制作者によるコーディングは常に利用者による実際のウェブサイトの利用に先立って行われていることをふま

えれば、制作者が施した配慮や利用者像の想定は十分ではないということが考えられる。

上記に挙げたウェブメディアリテラシー教育に関する二点の展望と可能性は、以下のように検討することもできる。第一点目は、ユーザビリティやアクセシビリティという人文社会学的な着眼点を重視するという点で、ICT の知識や能力の習得を目標とする教育、いわゆる「情報教育」とは切り離して行うことが可能である。第二点目は、HTML と CSS への洞察を深め、より正しいウェブデザインを追求するという点で、「情報教育」の枠組みで実践を深めることが可能である。もちろん、両者を相互補完的に取り扱うことで、ウェブメディアリテラシー教育の効果をより高めることが想像できることは言うまでもない。

筆者の提案するウェブメディアリテラシー教育の対象となるのは、もちろん、いわゆる「情報」「ICT」を専門とする生徒・学生だけではない。教育の対象には、それ以外の生徒・学生も含まれる。なぜならば、メディアリテラシー教育が対象とするのは「市民」であるからである。つまり、現代社会に暮らす我々すべてがメディアリテラシー教育の対象になるのである。従って、新しいメディアリテラシー教育の取り組みとしてのウェブメディアリテラシー教育の対象も「市民」、言い換えるならば、現代社会に暮らす我々すべてであるべきである。この意味で、ウェブメディアリテラシー教育は、文理融合的で学際的な取り組みであると言ってもよい。

5. 予備的実践の再考察

ここでは、上述のウェブメディアリテラシー教育の展望と可能性をふまえて、筆者の予備的実践を再考察したい。本実践では、本学のウェブサイトのデザインの批判的検討の一環として、フォントサイズ変更機能に関する自由記述回答形式の質問を設けた。そこから得られた回答には、非常に興味深いものもある。第一に興味深い回答群は、ウェブサイトをめぐるコミュニケーションにおける「潜在的な他者」「自分とは異なる特性を持つ他の利用者」への気づきに基づく回答である。具体的には、学生 B による「ウェブページが見づらく思っている人」、学生 D による「小さな文字が見えにくい人」、学生 H による「この機能のターゲットであるご老人などの方」への気づきである。

我々はウェブサイトのごく一般的な制作者または利用者として、自分自身以外の他者の存在や立場をどれほど正しく理解したり認識

したりしているのでしょうか。メディアを媒介とした場合に限らず、コミュニケーションは一般的に、一方通行的なものになりやすい。メディアを媒介とする場合にも、そのメディアが双方向的な特徴を持つものであったとしても、コミュニケーションは一方的になりやすい。ウェブサイトをめぐるコミュニケーションであれば、制作者であっても利用者であっても、自分の置かれた立場からの思考にとらわれてしまう傾向にある。言い換えるならば、ウェブサイトをめぐるコミュニケーションは「自文化中心主義」的になってしまう。

また、自文化中心主義から脱却できたとしても、制作者と利用者という単なる「自分と相手」の二者間のコミュニケーションに視野が限定されてしまう傾向にあるように思われる。しかし、3名の学生からは、コミュニケーションの潜在的他者という第三者の視点についての言及が得られた。このことは、肯定的な意味で、筆者の想定を超えるものであった。

第二に興味深い回答群は、ウェブサイトをめぐるコミュニケーションそのものの失敗に関する回答である。具体的には、学生Cによる「このような機能があることに驚いた」、学生Eによる「ボタンが小さく目立たない」、学生Gによる「ボタンをこれまで意識したことはなかった」、学生Hによる「ボタンがあまりにも目立たない」という回答に表れているウェブページのデザインの失敗に関する言及である。

これらの4名の学生によれば、フォントサイズ変更のボタンは目立たないので、ボタンの存在は認識されない。従って、これらの学生にとっては、フォントサイズ変更機能がウェブページに備わっていること自体が認識できなかったということである。一方で、制作者と本学は、ユーザビリティとアクセシビリティの確保と向上のために、このボタンをデザインし配置したことは言うまでもない。ということは、フォントサイズ変更機能の提供に込められた制作者と本学の意図やメッセージは、これらの学生にはまったく伝わっていない。つまり、メディアが構成する「現実」を批判的に分析する立場からは、本学・制作者・利用者の三者間のコミュニケーションはほとんど失敗に終わっていると判断できるのである。

繰り返しているとおおり、フォントサイズ変更機能は、実際には機能不全を起こしているが、本来、情報弱者にとってのユーザビリティとアクセシビリティの確保と向上を目的とするものである。質問票調査を実施した際には、これらのことについては、筆者は学生にはいっさい何も知らせなかった。コミュニ

ケーション行動の分析に関する予断やユーザビリティとアクセシビリティの議論に関する予備知識をいっさい与えないためである。それにも関わらず、実践に参加した複数の学生から、ウェブサイトをめぐるコミュニケーションの本質に迫る言及や洞察が得られた。この点で、ウェブメディアリテラシー教育の出発点としてのフォントサイズ変更機能への着目は大きくは間違っていないと筆者は認識している。

6. 提案の限界と欠点

上記で提案するウェブメディアリテラシー教育には限界と欠点がある。第一に、上記の提案にふさわしい議論の出発点の設定や教材の設定は簡単なことではない。上記の提案では、教育の題材として「ウェブサイトデザインの機能不全」という現実のウェブサイトが生じている問題を取り上げている。しかし、この問題が解決された場合には、議論の出発点や教材そのものが存在し得なくなるということである。さらに、教育の題材としてふさわしいような機能不全を起こしているウェブサイトを見つけ出すことは、教師にとって時間的にも労力的にも非常にコストのかかることである。しかしながら、すべてのウェブサイトは構成要素となるHTML、CSS、画像を保存することができる。この特徴をふまえ、一度見つけ出した教材となるウェブサイトを保存しておいたり、必要に応じてより適切な教材に作り替えたりすることは可能である。

第二に、上記の提案には、いわゆる伝統的な「情報教育」で扱われているインターネットやWorld Wide Webの特徴をあまり重視していない。例えば、情報の受け手の立場からの議論として、インターネット上に流布している情報には真贋を識別することが難しいものがある、というような論点である。さらには、情報の送り手の立場からの議論として、自分の意図を受け手により正確かつ確実に伝えるために、テクニカルライティングの知識・能力を習得する必要がある、というような論点である。もちろん、この限界と欠点を克服するために、上記で提案するウェブメディアリテラシー教育に伝統的な「情報教育」の視点を組み込み、適切なカリキュラムや授業を設計・開発することは非常に有用なことである。

7. おわりに

坂本によれば、メディアリテラシーやメディアリテラシー教育の考え方は、そのままインターネットにも適用できるが、メディアとしてのインターネットの特性に見合った方法

論を確立していく必要がある⁴。これをふまえて本論文では、ウェブページの機能不全、ウェブデザイン、ウェブサイトをめぐるコミュニケーションにおける三者の相互関係に着目し、ウェブメディアリテラシー教育の提案を行った。現代社会におけるインターネットや World Wide Web の重要性がますます高まっていくことをふまえ、我々には「情報教育」の新たな段階としてのメディアリテラシー教育の重要性についても理解を深めていく必要がある。

注

本学のウェブサイトは、CSS によって、表示フォントの種類とサイズが固定されている。このために、例えば、視覚障害者の利用を想定して、Internet Explorer でウェブページのフォントサイズを変更する最も基本的な方法（「表示」メニューから「文字のサイズ」を開き、フォントサイズを「最大」に変更する）⁴を採用したとしても、フォントサイズは変更されない。他にも、例えば、Firefox や Safari などのウェブブラウザの初期設定で、フォントサイズを 60 ポイントのような特大サイズに設定したとしても、初期設定値は完全に無効になる。

参考文献

- [1] 鈴木みどり「メディア・リテラシーとは何か」、鈴木みどり（編）『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』、世界思想社、pp. 2-22. 1997 年
- [2] 坂本旬「『メディア・リテラシー教育』とは何か」、坂本旬（編）『メディア・リテラシー教育の挑戦』、アドバンテージサーバー、pp. 1-17. 2009 年
- [3] マイクロソフト株式会社、NPO 法人 e-AT 利用促進協会『ICT アクセシビリティ 障害のある子どもの担任の先生のためのパソコン入門講座』、p. 3 章-11. 2010 年